いきをする

夏樹

ふられた。

澄み切って白っぽい匂いのする空気の中、少しだけ時期尚早なイルミネーションがぴかぴかしている中、かじかむ指先が赤く色づいている中。さむいね、と呟こうとして唇を開いたとき、少し斜め前を歩いていた体温が、くるりと振り返った。

「もう終わりにしよう」

開いただけの唇から、ただ白い息がこぼれた。

「みずきは俺がいなくても、ひとりでやっていけるよ」

え、とか、なんで、とか白い息の中でなんとか吐き出した言葉の一片ひとひらが、あっけなく叩き落とされていく。飛び込んできた情報が大きすぎて涙も出ない。

「じゃ、じゃあ、今日でさよならってこと？」

「ん。……俺は友達としてなら、続けていきたいけど」

通りすがりの人々がちらちらとこちらを窺っている。仕事帰りのスーツ。ぴったり寄り添うふわふわのファーベストとノーカラーコート。はしゃぐショートパンツとロングブーツ。ゴシップ記事をスワイプするときのような、エンタメ番組をザッピングするときのような、顔。

「貴弘」

「なに」

「私のこと、きらいになったの？」

振り絞ってふるえた声が、暗闇に溶けていく。

「そういうわけじゃないよ、みずきは悪くない。ただ俺たち、合わなかっただけなんだよ」

片手を挙げて去っていく恋人、いや、元恋人が遠くに見えた。

ふられた。

ああ、私ふられたんだ。

それからどうやって家まで辿り着いたのか。凍えた手のひらとふらつく足で、どうやって電車に乗って駅から歩いてきたのか。家の鍵を挿し込んで回したのか。ほとんど脳味噌をはたらかせずに、気がつけば自宅の玄関に座り込んでいた。

ふられた、という事実が重くのしかかる。

昨日まで仲睦まじく連絡を取っていたし、電話もしたし、しょっちゅう会っていた。ねえ明日は楽しみだね、と昨日電話で話したら、そうだねって笑い混じりに応えてくれた。

クリスマスはテーマパークに行こう。

二年記念日は温泉にしよう。

大学卒業したら、結婚してくれないか。

子どもの名前はどうしようか。

そういう、遠い未来のやわらかい約束が、今更鋭い針のように全身を突き刺していく。どうして、どうしてとぐるぐるかき混ぜて煮詰められたものが、あふれ出してしまいそうだった。

ひとりでやっていける？

俺たち、合わなかっただけ？

合わなかったなんて、言わないでほしかった。煮詰められたものがぽたりぽたりとこぼれる。貴弘がいつも私をリードしてくれるところが好きなのに。デートの場所やお店を、あらかじめ決めておいているところも好きなのに。冗談交じりにからかってくるところも好きなのに。手料理をねだってくるところも好きなのに。合わなかったなんて、言わないでほしかった。

冷え切ったフローリングが少しずつ体温で温められていく。化粧を落とさなきゃ。服も着替えなきゃ。

のそのそと立ち上がって、洗面所の電気を灯す。派手に明るいＬＥＤにくずれた化粧が照らされた。アイシャドウが涙の痕を残して、アイラインが掠れて、マスカラが下まぶたに落ちて、噛み締めたせいでリップがぼやけている。ひどい顔だ。凄くひどい顔。

クレンジングオイルに手を伸ばすと、すぐ横に歯ブラシが二本、それぞれのコップに挿されていた。ピンクと青い歯ブラシが、ふたつ並べられている。昨日までの幸せの名残が、まだ散らばっているのだ。

クレンジングオイルを力任せに数プッシュ。額や瞼や頬や唇に手のひらを滑らせる。手のひらを濡らして乳化させて、濯ごうと屈んだところで、鼻の奥がつんと痛んだ。

だめだ。またこぼれおちる。

痛みを水で誤魔化して、オールインワンジェルでとりあえずの保湿をする。もう一度鏡に写し出された顔は、鼻先と目のふちがじんわりと赤らんでいた。ぽいぽいと衣服を脱ぎ落すと、元恋人が好きだった色の布切れが素肌を包んでいる。見ないふりして上下適当なスウェットをひさしぶりに引っ張り出した。昨日の晩ていねいにやわらかくした肌は、誰にもふれられないまま部屋着に隠されていく。季節感のない丈の短い部屋着は、そういえばもうしまってもいいのか。

部屋の暖房をつけて、温まるまでクッションに沈む。スマートフォンで世界とつながると、ぽっかり空いた数時間ぶんの情報が次々に飛び込んできた。お気に入りのブランドの新作だったり、他愛ない友人の雑談返信だったり、エンタメニュースだったり。しんと冷え切っていた部屋が、温風によってゆっくりとあたたかくなる。冷気と冷水で凍っていた指先に少しずつ血が通う。

ぽん、と通知が音を立てた。

『さっきは突然ごめん。ちゃんと帰れた？』

見慣れた、見慣れ過ぎたアイコンからの連絡に、きゅうと眉に力が寄った。

『俺はみずきと関係を絶ちたいわけじゃないんだ』

『ただ、恋人としては違うかなって』

『友達として、これからもいい関係でありたい』

ぽんぽんと勢いよくやってくる弾丸。

友達として、いい関係で。静かに唇を動かすと、また鼻の奥がつんとした。一度恋人になったふたりが、深いところまで知ったふたりが、友達に戻れるわけがない。腰のあたりにあるほくろとか、素肌をすべる手の動きとか、つき合わせた額の体温とか、そんなことを知って、友達に戻れるわけがない。

『みずきがよければ、友達としてまた会わないか』

弾丸の追撃。

「お腹、すいた」

煮詰まったものの代わりに、こぼれた。

「お腹すいた」

再び口に出すと、お腹の虫が目を覚ます。夕飯は食べたけれど、お皿の白い面積の方が大きいパスタとか、盛り付けに気を配られてこじんまりしたサラダとか、そういう夕飯もどきじゃあ、お腹の虫は眠ってくれない。血の巡った手足を動かしてキッチンの冷蔵庫を開いた。少し漁って、目についたいくつかをすくい上げる。

パックに数個残ったたまご。朝のサラダに使った余りのハム。ドアポケットにはマヨネーズのチューブ。もっとがっつりしたものが食べたくて、なにかないかと冷凍庫も漁る。

出てきたのは冷凍しておいた八枚切り食パン。貴弘は薄くてカリカリしたパンが好きで、いつも八枚切りを冷凍庫に常備していた。それが、あと一枚だけある。

パンの袋を引っ掴んで、冷蔵室からたまごとハムとマヨネーズを手に取って、冷気を閉ざした。こっちはお腹がすいたのだ。テレビやネットでよく見かける、そのわりにしばらく食べてなかった、マヨたまトースト。食べよう。

時刻は日付が変わる直前。それがなんだっていうの。

オーブントースターにアルミホイルを敷いて、銀色の上に冷凍食パンを乗せる。からっぽになった袋はごみ箱に放り込んだ。手をすすいで、かちかちに凍った小麦色とハムの薄桃色。マヨネーズチューブのキャップを指で押し上げて、しずく型をさかさまにした。

いや。待て。このマヨネーズはなんのためにある？

キャップを指先で閉めて、回転させてキャップごと外してしまった。このマヨネーズは卵を溢れさせないための土手になるのだろう。たぶん。もう一度しずく型をさかさまにして手に力を込めると、太い線がパンの端をすべっていく。カロリーの爆弾に彩られていく。

「わ、すご」

シンクに軽くぶつけてヒビを入れた主役を落とす。美しく濃い橙と半透明の白が、すべての魅力を百倍くらいに底上げした。土手がわりのマヨネーズが、ぎりぎり堤防を守っていて、たまごがぷるんとゆれる。暗がりでもわかるほど艶めいている。

欠片たりとも崩したくなくて、そうっとオーブントースターの蓋を閉める。ネットで少し検索して目盛りは八分に決めた。冷たい暗闇にぼうっと光がともる。

何もすることが無くて、お皿を持って暖かな光を見つめる。じりじりと土手に焼き目がついて、たまごがふつ

ふつと表面を白くしていた。食パンが解凍されて、ふちが濃く色づく。橙色の黄身に薄い膜が貼って、マヨネーズにところどころ焦げ目がついたところで、小気味いい音を立ててオーブントースターが出来上がりを教えてくれた。

「すご、おもた」

耳がかりかりになった食パンをそっと持ち上げると、具材の重みで中心が少したわんだ。マヨネーズのコクのある匂いがいっそう濃くなってお腹を揺すり動かす。スマートフォンのロック画面は変更された日付を表示していた。とんでもない時間にとんでもないもの。口の端が持ち上がる。

リビングの光がお皿の上のご馳走を照らしている。手を合わせて、少し焦げ茶色になった食パンの両端に手を添えた。唇をおおきく開けて、ひとくち。

がしゅ、とかぶりつく。

「ん、ん」

薄くてこんがり焼けた食パンと、焼き目がついたマヨネーズ。香ばしい小麦が鼻を抜けて、こってりしたマヨネーズと混ざり合ってやわらかくまとまる。ざくざくと噛みしめて、もうひとくちかぶりついた。今度は卵の白身とハムまでたどり着いて、ぷるぷるした白身としっとりした肉が、ほろほろ崩れていく。たまらずもう一度、もう一度と食パンに歯形をつけていく。王様みたいなたまごの黄身を守るように、追い詰めるように。

食パンが薄いから、ひとくちごとに崩壊してしまいそうになる。六枚切りとか四枚切りとか、厚い食パンの方がいいのかもしれない。そもそも私は四枚切りの方が食べ応えあって好きだ。厚い食パンにたっぷり具材を乗せたパンが好きだ。たっぷりチーズのピザトースト。焦げ目のついたツナコーントースト。コンビーフとチーズを乗せたトーストも好きだ。貴弘に女の子らしくないって笑われてからは、ジャムとかバターとかフレンチトーストにしてたけれど。

くちびるの端を舌先で舐めとる。鎮座した黄身が、わずかにゆれていた。マヨネーズが乗った食パンごと、まずは端の方からかじる。半熟超えたくらいに固まってくれたようで、濃い橙が食パンに近づくにつれ黄色に変わっている。もったりとほくほくの黄身が混ざって、マヨネーズのがつんとした風味がまとめあげている。

くちびるについた黄身を指で拭って、それも舐める。

貴弘がいつも私をリードしてくれるところ、私がしたいことやしたくないことを伝えると機嫌が悪くなってしまうから、いつも受け入れて喜んでいた。

デートの場所やお店をあらかじめ決めておいているところ、人の多いテーマパークやイルミネーションや観光地に手を引かれて、こじゃれたフレンチやイタリアンやカフェやスイーツを食べさせて、「女の子はこういうのが好きなんだろ」と片眉と口端を上げるから、いつも人混みが苦手でがっつりした食事が好きなことを飲み込んではしゃいでいた。

冗談交じりにからかってくるところ、傷ついたり怒ったりからかい返すとふてくされてしまうから、いつも軽く笑っていた。

手料理をねだってくるところ、品数が少ない日や食費を請求した日は舌打ちされたから、いつもバイト代と仕送りを切り詰めて振る舞っていた。

貴弘も似たようなことがあったのかもしれない。私が無意識に強いていたこともあっただろう。

それでも合わなかったなんて、言わないでほしかった。私が歩幅を合わせていたんだから。

ぽん、と、また通知音が遠く聞こえる。ロック画面を一瞥して、アプリケーションを起動させた。友だち一覧をスクロールして、むにむに操作してブロック。光を落としてテーブルに置き、また口を開けてかじる。半熟の黄身がとろりとこぼれて、白身と食パンを彩った。

友達として、いい関係。呟くと乾いた笑いが漏れる。次の相手が見つかるまで都合のいい関係でいましょう、をオブラート何枚包めばそんな薄っぺらい言葉になるのだろう。無料家政婦？　ダッチワイフ？　これから凍える冬になるから、人恋しいとき用のぬいぐるみ？

これからは好きにがっつりしたご飯を食べよう。焼き鳥丼とか、ぺぺたまとか、チキンサンドもまた作ろう。ふわふわもこもこのくせに丈が短くて寒いルームウェアは、春になるまでしまっておこう。赤やピンクや白のフリルがたっぷりあしらわれた下着は、インナーを着ても服に響くし手洗いするにも面倒だった。もう少しシンプルなものを探してみよう。

いつの間にか暖房の温もりで部屋がふくらんでいる。じんわりと熱を持った手足は、もうどこも冷たくない。

最後の一口大になったトーストと向き合って、口を開ける。奥歯まで見えてしまいそうだ。けれど誰も気にしていない。ここは私の部屋で、私のための料理だから。

たまごのまろやかなコクと、弾力ある白身と、ほぐれたハムの切れ端と、香ばしいマヨネーズと、ざくざくの食パンが、ひとまとめに口の中に広がり、喉を通る。

「あー……」

そうだ、青い歯ブラシもう捨てよう。